

人間の罪と神の裁き

使徒パウロは、1 章 18 節以下で、神の怒りの下にある人間の姿、従って、福音を絶対に必要とする人間の罪の姿を描いてみせる。ここに示されているのは、神から離れた人間の罪の状況である。そして 18 節でこう語る。「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して神は天から怒りを現されます」。ここで「現される」は原語では現在形が使われていて『現されている、啓示されている』の意である。神の真理をはばもうとする人間のあらゆる不義と不敬虔に対して、神の裁きは、今、現実、現されている！下されている！という。

このパウロの言葉は大変注目すべき教えである。この世の罪の現実に直面して、このような悪がはびこっているのに、もし神がいるならば、何故神は人間の罪をさばかれないのか、と或る人々は神を罵っている。それに対してパウロは、神はすでに人間を裁かれている！人間はすでに神の怒りの下にある！という。どういう風にか？それをパウロは、この 24、26、28 節で言う。「神は彼らが心の欲情にかられ自分の体を互いに辱めかき、汚すままに任せられた・・・それ故、神は彼らを恥すべき情欲に任せられた・・・そして彼らは神を認めることを正しいとしなかったので、神は彼らに無価値な思いに渡され、為すべからざる事を為すに渡された（任せられた）。」

それはどういう意味であるか？ それはこういう意味である。罪を犯している人間にとって、その犯している罪そのものが、まさに罪に対する神の裁きである！ 神を神として認めようとせず、神を神として崇めようともせず、自分の思いのままに、神に反抗して歩もうとする人間の傲慢に対して、神は「その為すがままに任せられた」。すなわち、罪に渡された。そしてその結果を自分の身に受けている、これがまさに人間の罪に対する神の怒り、神の裁きだ、というのである。実に厳粛なことである！

ドイツの或る注解者が言う。「神の与える最大の罰は、人間を罪を犯す力に渡されたことである」「神の裁きはすでに現された。ただ神は罪人を地獄に渡さないで、罪に渡されたのだ。」その通りだと思う。

神の愛と忍耐の下に生かされていることを認めず、神なんかいやーしない神の裁きなんてありはしない、と思っただけはいけない！神が人間を支えている、その恵みの御手を差し控えるということが、人間にとってどんなに大きな裁きであるかを、私たちはこの所から学ぶ必要がある。親の度重なる忠告と警告を無視して、ますます反抗し、放蕩を重ねる息子が、ついに親から見放され、その為すがままに任せられ、放っておかれるということがその息子にとって、それ以上の悲劇があるか！それと同じように、神が、反抗する魂をその罪の為すがままに（墮落するままに）任せられる！神の恵みから見放された状態に置かれるということ、これこそ人間に対する神の裁きなのである。

罪に対する神の裁きは多様である。最後の審判における裁きだけが、罪に対する裁きではない。私たちの神は、この地上においても罪を裁き給うお方悔い改めようとしない傲慢な魂を地獄で裁く代わりに、罪に引き渡すことによって（その為すがままに任せることによって）この地上で、裁き給うことのできるお方なのである。これは、実に厳粛なことではないか。私たちは皆キリストにおける罪の贖いと赦しを必要としている存在なのである。